

たより 『美紗のヘ
ニユーリ

第39号

発行者
「美紗の会」
☎03-3441-2726
編集責任者
大久保朋子

春風さんや　主の情でて吹いて
いたじやないか　なぜに吹いて
たか　夕べの嵐

まだうら若き頃よく「すざ
んだ小唄である。恋の行方に
心ときめき、男女の微妙なかけ
ひきを桜の散り際に託した
描写が、なんとも切なくな
めかしく、唄うたびに心の闇
を桜色に染めたものだった。
そしてこの春。世情が、まる
で桜に移つたかの如く、
仇花のようにはパツと咲き、幻
想に浸る暇もなく一陣の風と
冷たい雨と共に散つてしまつ
た。しかし唄は過ぎし後も、
その情景を鮮やかによみがえ
させてくれる。決して押しつ
けるのではなく、昔どこかで
聞いたかも知れない遠くから
かすかに響いてくる「哀愁」
の音のように。かつてヨーロッパ
郎は、この音を「しめやかな
哀音」「溢れ出る感情を抑え
たむせぶよくな幽かな魂の訴
え」と表現したという。東洋
のルソーと言われた中江兆民
は、「一年有半・続一年有半」
の随筆の中で、日本の三味線
音楽にぞつこんだつことに
感触、常磐津・清元・長唄の
話を綴つた後、歌詞に至つて
は、「その中実に寸鉄人を殺
す者あり」とまで書いている
私自身なぜこれまでに三味
線音楽にひかれていたか深
く考えもしなかつたが、やは
り本来あるべき人間の心の叫
びが潜んでいるからなのだと

「情念の世界」によせて

男に捨てられた泉式部が貴船神社に祈つたという言い伝えに由来しているのだそうで、未だに境内の樹木に真新しい釣人が打ち付けられていたことがあります。それがどうです。

駆け込んだ妻が祈りを捧げ願いを申し出ると、鬼になるための手順が神に託されました。それはまず、髪を五つにわけて束ね、そこに、逆さにした鉄輪を結びつけて、逆さにした鼎のようなものを作ることでした。鼎の三本の脚にたまつを付け、顔に朱塗りをして、さらに口にたいまつをくわえて都大路を南下せよ、といふものでした。これで鬼に

講演に続き、まずは津村禮次郎さんの仕舞によつて「鉄輪」が上演られました。仕舞では鬼になつて取り殺そうと立ち向う妻が、責めめられた怨鬼の神通力による勢い絶え「一力もたよたよ」と失つて引き返すまでの様子が、恨みの言葉を断片的に挟みつつ情景描写の積み重ねで語られました。

一方、続けて上演された、女流義大夫・竹本朝重さんの語りによる馬場あき先生作詞の「橋姫」と、同じ詞に吾らが西松布咏師匠が作曲した「創作舞踊」橋姫(唄・三味線・西松布咏・松田弘之)

「貴船の神に申しつつ、恨みの鬼となつて、人に思ひ知らせん。うき人に思ひ知らせん」青年を超えて、今もなお、その年は変わつてくるようす。もしかしたら古い樺の木が耳元でささやいているのか、もれませんが。

思ふようになつた。自然の描写や遊女のない魂のゆらぎがい昇華出来ない魂のゆらぎがいとおしい程に語りかけてくる。なぜに吹いたか夕べの嵐一の節は、毎日のように繰りひろげられる政治のドタバタ劇。人間不信に怒りを通り越した我々の悲しいつぶやきのようではないか……。そんな時には、氣をも直して、「程々に色気をもつて品も良くなりとて冷たくない女に逢つてみたいような春の宵」。などと鼻歌まじりにほろ酔い気分で唄つてみた。今、美紗の会は、さまざまな場で活躍している老若男女

が、ひととき浮世を忘れ三筋の糸に耳を澄ませ、先達の残していった言葉を自分の心の中で反芻し、個々の特長が浮彫りされた新しい眼となつて紡ぎ出される楽しい会として注目されている。

一曲を生み出すには、樂約束事に基づかり、糸と唄の微妙なずれを埋めてゆく忍耐力の時の時があるけれども、遠くから聞こえてきた言葉や音が、だんだん近くになり、昔が今に至るのみがえる。そしていつしかまろやかに熟成し、知らず知らずのうちにふんわり心が開放されてゆく。それこそが長年迷い苦しみながらいた「ふりかえる未来」であると、今こそ唄うことの大切にしてゆきたいと思います。

する講演がありました。橋姫の話を京に住まいしして今に伝えられています。物語の発端は夫の浮気。若い女にウツツを抜かし、家に寄り付かなくなつたのを悲しんだ妻が、その恨みをはらさんと貴船神社に駆け込むという前段の物語があつて、仕舞が始まります。

馬場先生によると、中世、妻としてできることは「呪いをかける」「殺客を頼む」「鬼になつて手向う」ことの三つしかなかつたのだそうで、貴

橋の向こうに行つてしまわなければならなかつたということで、やがては転化したと橋の守り神「橋姫」となつたとのこと。

愛という言葉が今のように使われる以前、日本では「恋」ということばがその位置を占めていたのだそうです。古くは「こひ」「相聞」ともいわれ、万葉集では「孤悲」という字が用ひられ、手に入らないものを「乞ひる」気持ちに由来するとのこと。

そんな時代、手が届かなくなつてしまつた男への恋の苦しみを收めるには、自らの弱

りしているというのに、いざ授かってみれば、それは終わり亡き生々流転の道であつた世界一の長寿国であることを祝う傍らで、終わりある命の複雑な美しさを称えた世界と現存の古本をヒントに創作して問い合わせてくれる、今こそ問われる意味のある問題作だと思いました。

なれるというのです。
ところが、鬼になつた妻は、大路を南下し、いざ男の居所まで行つたところで、なぜか力を失つて引き返してゆきました。
鬼になれば、恨む相手を取り殺しても罪に問われなかつたのだそうです。しかし、そのかわりいつたん鬼になつた者は人住む里、あるいは都には帰れないきまりになつていたそうで、事實上、捨て身の力で、加藤孝子・舞踊)は「蜘蛛の糸に荒れたる駒は繋ぐともう一道(ふたみち)かくる徒ひとを」とだならぬ状況描写からドラマチックに始まります。この「橋姫」には「恨みながら恋しや」という副題もみだらされています。
馬場先生は、講演の終りに、鉄輪の物語に今日的な解釈を呈されていましたが、それは、「取り殺そうとしたその手は、かつてその男を抱いた手でした」といふのです。

私はと申しますと、稻生さん
の「忍ぶ恋路」の伴奏を
しつとりとつとめようとした
のですが、励みすぎて「元
気な恋路」になってしまいま
した。トホホ。もつとしつと
りしたら、稻生さん、またよ
ろしくおねがいします。

当日、杉や檜の花粉がひど
かつたようで、皆様グズング
スンやつておられました。私
の友人は「花粉の季節は植物
の繁盛期なのだから、無粹な
コトを言わない」と可哀想じや
せてやらないと可哀想じや
いか」と言うのです、つまり、
花粉は杉の恋唄なのだ、とい
う意見です。コリヤもつとも
だ、とは思つたのですが、そ
れにしてもハタ迷惑な恋です。

もう桜が散つてしまいまし
た。あつという間でした。駆
け抜けようでした。
桜のつぼみがまだ固
かつた三月十一日、お天気も
まづまづ。春に美紗の会第
二十三回おひきぞめが行われ
ました。兄弟子姉弟子御来賓
お客様スタッフの皆様方お
疲れさまでございました。そ
してお師匠にも大変お世話い
ただきました。改めまして、
皆様 大盛況でおめでとうご
ざいました。
ムは今四、二度目の登場で

紗の会
隨

想

とした唄。やはり遠くに目指すはコレ、と念じつつ唸らせていただけました。ああ、この先輩方はどんな恋をなさつてきたのだろう、どんな出会いや別れががあったのだろう、なんでこそがモチアリホロリと考えました。以下、その時考えたりしたコト。

日本は水の国だ、と申します。これだけの面積にこれだけたくさん川が流れている國だ、というのは、「他にないんだそうですね。世界的に見れば、隅田川のゆつたりした流れでさえ急流の部類に入るんだそうで、そりやアマゾンとかガンジスにくらべればそうでしようけど、隅田川を急流と言つてしまつちゃあ、

杉や檜にも、もうちょっと忍んでもらえるといいのに、と、思いました。え？ その前にオマエも吉古しろ？ ハイ。明朗快活勇み肌の若手姉弟子方と、アレワイサな若手姉弟子方（通称・白金アレワイサーズ）のバラエティには、私が当日連れてまいりました漫才師・セーディサンも大感激「このノリはええナあ」と感心されてました。お花見の営業シーズンが終わつたら入門業準備を始めるココロのよう

水がいっぱいある、そして川がいっぱい流れているから、日本には水の言葉、川の場面というものがあふれている。どうかを映したがる、橋がよく出てくる、川下りの文学や音曲が多い、川遊び、舟遊び、もちろん海の場面だつて沢山あります。町の世界は圧倒的に川のほうを最重に置いているように思ひます。最重なんだからしようがない（笑）。川は、何かが流れてきて、そのまま流れゆく一期一会の象徴。ただの水だけではなくとくと乾いて跡かたなくなってしまう。なんとも日本的な美意識を湛えています。この

過日「美紗の会」の折は、貴重なイベントの一環を私の為に戴いて戴いて、誠に有難うございました。長かつた様な二十数年を、短かつた様な二十数年を、ふり返って感無量でした。会主のお母様から花束を戴いた時、あそこで私が感動的為ヨと泣き崩れたら、随分と絵になつたのでしようが、生憎私は人様の前では絶対に涙の出ないライ人間なので、あんな素敵なシーンがあるので、かんとしていた私を皆様お奇

「きたくて」という温情。大変いい記念になりました。

と、アレワイサなワタクシでも美紗の会のおさらい会に出ると、このくらいの事を思ふんであります。実にダメになる、本当にいい温情の場です。皆様、ほんとうにありがとうございました。また何かの行事の時、お目にかかるますこと、楽しみにいたしております。毎度毎度の一期一会。次は何が川上から流れてくるのでしょうか。ますますココロが弾みます。

そうそう、紫いものおせんべ、おいしかったですね。私、ちょっとヤミツキになりました。ごちそうさまでした。

を見て、あ、私はなんて優しさの無い乾いた人間なのだろうとちょっと淋しくなりましたが、これは持つて生まれた性格で仕方のない事なのでしょう。

閑話休題、私が先生のもとへ入門したのは昭和五十年か五十一 年頃でしょうか。まだ先生も私も若くて、そして先生のお頭も、今の様に洗練された魅惑的なお声では、すこし違ったピントと澄んだ感じの可愛らしさ色気がありました。

新人インタビュー 美紗の会

本当に大型新人です！ 体重
!? キロ、胴回り〇〇〇cmなど
これから見ても大型。太めを
誇っているインタビュアーの
私、大久保が隣で華奢に見え
たのでは…? と思え
川崎隆章さん、三十七歳。
お仕事はラジオのディレクタ
ー。師匠との出会いは、一
昨年暮の松岡正剛さんの納会、
師匠にCDをもらい礼状を出
したのがきっかけで、それか
ら弟子になろうかどうしよう
かと考えつ、決心したのは
昨年の七夕コンサートの時。
それから二ヶ月後入門となり
ました。

のばかり。そんなハードルを幾つか越えて、漸く唄う事を会得した頃は、老化現象で声は出なくなり、又三年程前にはケガでなり年腰痛となり、三味線の重さも辛いものとなつて老いを感じる様になつてしましました。そこへ突然に転ばの話が起きましたので、退かせて戴く決心をしたのです。でも好きな小唄をやめてしまふ事は淋しい事なので、こつそり練習を重ねていて、会に呼んでいただけの事があつたら、飛び入りで出させて戴こうかな、などと不敵な事を考えたりしています。私が長く

今回の初ざらえでは、花粉症と格闘しつつもよく通る美声で、将来がとても楽しみです。

田中優子 友だちとライブ？
芸能鑑賞と味覚
一泊三日の旅
五月二十四日

続けさせて戴いたのも、先生や御家族のお人柄が好きだつた故です、数年前お母様とごいしよに、先生のアメリカ旅行をお供をさせて戴いた事も生涯忘れられない素敵な想い出です。

又美紗の会の皆様との交流も年に一、三回ながら、いつも楽しく過ごさせて戴きました。深く御礼を申し上げます。そして先生と美紗の会の御繁栄が弥栄あります様お祈りいたします。

長い間、本当に有難うございました。

二十六日(日) 海の幸・山の幸に恵まれ、伝統芸能を大切に育てている佐渡・島隨の一の老舗旅館「吉田屋」で、田中優子先生のナビゲーターで西松布咲が、文弥人形と共に、富田「松風」創作・端唄を唄います。 東京からツアーや組んで楽しい春の旅を企画しておりますので、皆様お誘い合わせの上、ご参加下さいますようお願い申しあげます。

お
知
ら
せ

ちとライブ2 佐渡
鑑賞と味覚・観光
泊三日之旅